



Interview

# THE SAMURAI OF PROG

Steve Unruh / Kimmo Pörsti

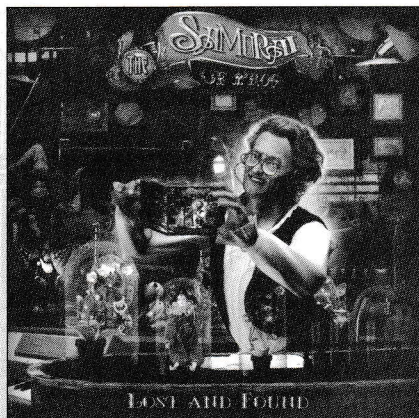
スティーヴ・アンルー、キモ・ペルスティ



L to R: Steve Unruh (vo, violin, flute), Marco Bernard (b), Kimmo Pörsti (dr, perc)

THE SAMURAI OF PROG が最新作を完成。これまでもアツと驚くカバーや、まさかのご本人登場、意外なゲスト登用などでマニア心をくすぐってきた彼らだが、「Lost And Found (遺失物発見)」と題されたこの作品では、CATHEDRALを始め、LIFT、QUILLといった「幻の」アメリカン・プログレッシヴのお蔵入り未発曲をご本人達登場のもとで現代に向けて完成させるという、何とも手のかかる作業をやったのけたのである。その意図、苦労話や制作への意気込みにまつわる興味深いエピソードを、勇氣あるサムライ達に語ってもらった。

Questions ● 内田哲雄 訳 ● 宮坂聖一 / 中西暢久 Disc Reviews ● 三輪岳志 Artwork ● Ed Unitsky



## THE SAMURAI OF PROG Lost And Found (16)

マーキー/バル・アンティーク MAR 162548-9

\*今号 p20、レビュー参照

— THE SAMURAI OF PROG (以下 TSOP) 最新作の完成、おめでとございます。この作品は、'70年代アメリカで短期間活動していた「幻のシンフォニック・バンド」の未発曲を再現するという、考えようによっては非常にマニアックなものになっています。このアイデアはどのようにして生まれたのでしょうか? こうした背景を考えると、アルバム・タイトルの「Lost And Found」は非情に的を射たものだと思うのですが…。

Steve Unruh (以下 SU): どうもありがとう! タイトルは全くその通りの意味で選んだんだ。これらの曲は失われていた。曲の存在自体を知っている人すらほとんどいなくて、バンドのメンバーは、こうした曲がきちんと録音されたり、リリースされたりすることはないと想定していた。傑作となる可能性があったものの、失われてしまっていたんだ。それが今、発見されたというわけさ。

マルコ(・ベルナルド)が元々のアイデアを持っていた。「70年代に数多くのバンドがあり、アルバムを1枚しかリリースしなかったが、「それ以外にどれだけ多くの曲を作曲して、リリースしなかったんだろう?」と

想像してね。このアイデアは「The Imperial Hotel」('14)に取り組んでいる時に生まれたんだ。マルコは、忘れられたままになっている隠された宝石がまだあるかどうかを確かめたかったので、Facebook や Eメールを通じて色々なバンドと連絡を取り、たくさん返事を得たんだが、その多くが「あるよ!」というものだった。

— 楽曲のセレクトはどのようにして行なわれたのですか? ほとんどのレパートリーはお蔵入り、あるいは録音が存在するかどうかもわからないレアなものなので、どのように再現、アレンジされたのか非常に興味深いです。

SU: 中核となるトリオ(マルコ、キモ、スティーヴ)は、3人による民主主義のように動く。意思決定は簡単で、これは3人だとフィフティ・フィフティに分かれることがないからね! 僕達は(通常は'70年代にバンドが自分達のために制作した古い自宅録音である)音源をすべて研究し、TSOPのスタイルと楽器構成に一番合うと考えた曲を選んだんだ。

次の答えについて先にお詫びしておく。これは技術的なものになる!

曲のアレンジや再制作はすごく大変だった! ご存じのように、僕達のバンドは多国籍なので、全員が1ヶ月同じスタジオに集まるというのは不可能なんだ。このため、すべての曲について、使えるガイド・トラックを用意し、全員が自分のパートを發展させ、録音せざるを得なかった。だが、どのようにガイド・トラックを作ったかは曲ごとに違う。「Preludin」と「The Demise」については、ステファン(・レンストレーム)がアレンジに関してははっきりしたアーティスティックなヴィジョンを持っていた。ケン(・デロリア)が'70年代にQUILLで「The Demise」を練習していた時の音の悪い自宅録音源を提供してくれて、ステファンが何週間もかけてこの録音を研究した。ステファンはQUILLのファンで、彼のアレンジは、元の宅録のメロディやコードに対するオマージュと、大胆な新しい方向性の魅力的な組み合わせになっている。僕はオーケストラの導入を提案したんだが、これは彼にとっては未知の領域でね、でも彼はやってのけた! ステファンは常々アップデートをよこして、どういう風に進めるのかについての意見を求めてきた。毎週、ステファンから最新版を受け取るのはとてもスリリングだったよ。何しろ、突然チベットの山々の音楽へと連れて行かれ、それからファンク・ショウ、その次はオーケストラ・ホールへと誘われるわけだからね。

“Inception”については、チップ(・グレミリオン)がLIFTのライブ演奏(たぶん唯一の前人での演奏かも)の古い録音を提供してくれて、僕がこれを何週間も研究した。どこでセクションをカットしたり、繰り返したり、テンポを変えたりするのがはっきりするまでね。僕は自分のエディットのデモをSonarで作り、ステファンがそこから後を引き受けた。

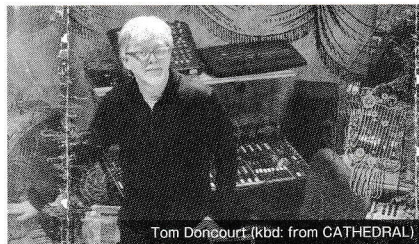
トム(・ドンコート)はCATHEDRAL、それにODYSSEYのメンバーだったので、研究用に古い録音を送ってくれ、その間に新しいキーボード・トラックをメ

ロノームに合わせて録音したんだ。

ベーシック・トラックは100%新しいものだ。すべてが新しいクリック・トラックに合わせて始まり、自分達のパートを一つ一つ付け加えていった(通常は、ガイド楽器とラフなヴォーカル・トラックから始めて、みんなが自分のパートを演奏する時に、頭の中で曲がフルに想像できるようにした)。続いて、ドラム、ベース、そしてベースとドラムとよりびつたり合うように新しいキーボードの順に録音し、最後のヴォーカル、それからヴァイオリン、フルート、ギター、プラスちょっとしたチャイムやシェーカーのような“ケーキの飾り付け”を録音した。

—— 各曲に再現元となるバンドのメンバーが、何らかの形で参加しています。CATHEDRALのトム・ドンコートは近年も作品を発表していますが、特にLIFTのチップ・グレミリオンやQUILLのケン・デロリアの参加はかなりのサプライズでした。各曲においてオリジナル・バンドのメンバー達はどのような経緯で制作や演奏に加わり、アレンジに関わったのかをお聞かせ下さい。

SU: トム、チップ、それにケンの全員がかなり関わっている。未知の宅録を提供してくれたよ。チップとケンは、僕達と曲の思想について突っ込んだ議論をたくさん行ない、バンドの元々の意図、歌詞の背後の物語、そしてバンド生活についての物語を説明してくれた。チップは“Inception”でゲスト・キーボードを担当している(“The Demise”でケンがゲスト・キーボード・ソロを弾くところまで行きかかったんだが、色々あって上手くいかなかった)。トムは、“She”と“Plight Of The Swan”の(新しいキーボード/メトロノーム・ベース・トラックを含む)キーボード・パートをすべて提供した。彼らとはアルバム制作中に渡ってずっと話していたので、今では良い友達になったよ。



Tom Donecourt (kbd. from CATHEDRAL)



Chip Gremillion (kbd. from LIFT)



Ken DeLoria (music composer. from QUILL)



Stefan Renstrom (kbd. from SIMON SAYS) R.I.P.



Steve Unruh

### Mellow Recordsのオーナー、マウロ・モローニが、 自分のことを

「The Pharaoh Of Prog (プログレのファラオ)」と呼んでいたから、  
マルコ(・ベルナルド)は冗談で自分のことを  
「The Samurai Of Prog (プログレのサムライ)」と呼び、  
バンドもその名前にしたんだ

(スティーヴ・アンルー)

—— 今回もGLASS HAMMERのメンバーを始め、YESのジョン・デイヴィンソン、SIMON SAYSのステファン・レンストレーム(ご冥福をお祈りいたします)、BRIGHTEYE BRISONなどがクレジットされています。アルバムの制作エピソードに関し、彼らの演じた役割なども交えてお話し頂けますか?

SU: このアルバムの全体に渡ってステファンらしさがあるね。この作品を実現する上での彼の重要性はどれだけ強調しても足りないよ。ステファンは、多くの曲でアレンジの中心であり、メインのキーボード奏者を務めた。ステファンは、“The Demise”での演奏が自分の代表作だと確信していて、僕もそれに同意するね。

ジョンがまた加わってくれて非常に喜んでいる。最初は僕が“She”を歌おうとしたんだが、ひどい仕上がりがだった。僕の声域の中で最も合わない部分が強音として必要とされていたんだ。ジョンに、「助けてくれ! 僕が歌おうとしているこのデモを聴いてくれ! お情けをかけて欲しい」と話したんだ。

BRIGHTEYE BRISONとの繋がりには、このアルバムで強くなっている。ヨハン(Johan Öjjen)は本当にたくさんの、素晴らしいギター・ワークをやってくれたね! そしてリーヌス(・コーセ)(ÄNGLAGÅRD)は、またもやこのアルバムにおけるサクスのマスターとなっている。

またキース・クリスチャン(QUILL)が、“The Demise”で、僕、マーク・トルーク(UPF / UNITOPIA)とリード・ヴォーカルをシェアしている。スティーヴ・スコーフィナ(PAVLOV'S DOG)が“Preludin”で、カムラン・アラン・シコー(GLASS HAMMER)が、エピック・ナンバーの“Inception”で素晴らしいギターを提供している。

「ゲスト」で参加してくれたそれぞれの人達の役割は、アルバムにそれぞれの特別な味を添えることだ。何を演奏するかを指示するわけではない。ただアイデアを出して、あとは自由に任せ、自分達が望んだようにアーティストと曲の組み合わせが上手くいくことに期待するんだ!

Kimmo Pörsti (以下 KP): 昨年の夏、ステファンが“The Demise”を仕上げた頃は、ドラムを録音するタイミングでもあったので、彼とはほとんど毎日連絡を取っていた。たくさんEメールで議論をして、彼からは“The Demise”に対する自分の演奏がどのようにミッ

クスされたいのかという希望の説明を受けていた。彼が亡くなる数日前に、最後の音楽ファイルを受け取ったんだ。だから本当にショックだった。数ヶ月後にアルバムをミックスしている時に、できるだけステファンの願いをかなえようとした。この悲劇の中で幸いだったことは、彼がそのとてつもなく素晴らしい仕事を終えて、そのファイル、そしてこの57分の芸術作品を制作するにあたっての自分の願いを私に伝えることができたことだ。だから、心からすべてが彼の願い通りになっていることを望んでいる。

—— 前作「The Imperial Hotel」は、ENGLANDの未発表曲を核に、オリジナル要素を加味してアルバム化するという、やはりマニアックな発想で、作曲者のロバート・ウェップの参加も目を引きました。しかし、日本のファンにとってはKENSOの清水義典の参加が大変なサプライズでした。彼に声をかけた経緯、期待した効果などをご説明頂けますか?

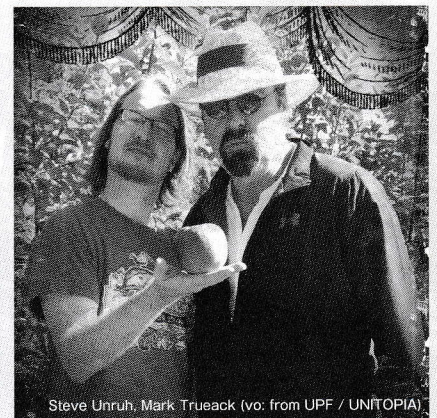
SU: 特にキモがKENSOの大ファンなんだ。貢献してくれる人達に一番期待しているのは、アーティストとしての強い個性だ。ギタリストを、彼らが輝ける曲と組み合わせるようにしている。たとえば、「この曲にはジェフ・ベックみたいに響くギタリストを探そう」とは決して言わない。代わりに、「なあ、ロイネ・ストルトがこの曲で何をやるか聴いたら凄くないか?」という風にね。僕達は、義典さんが“Limoncello”で何をするかを聞いてみたかった。そして、ああ、彼がああ曲で弾いたギターは予想もつかないほどの(凄い)所まで行っていると思うだろ!

KP: ああ、僕は長年に渡ってKENSOの大ファンだったので、マルコが義典さんに演奏してくれるように連絡を取ったときはゾクゾクしたよ。それから彼と連絡を取れるようになったのも幸せだった。それに、彼のおかげで僕のKENSOコレクションが完全になったんだ(笑)。

—— TSOPの名がプログレッシヴ・ロックのフィールドで知られるようになったのは2009年頃だと思いますが、このユニットが結成されたストーリー、活動理念などをお聞かせ頂けますか? また、ユニット名の「SAMURAI」が、日本人としてはやはり気になります。この名前はどのようにして生まれたものなのでしょうか?

SU: この質問について、マルコがTSOPの名前についての本当の話をしてくれた。THE COLOSSUS PROJECTの「Tuonen Tytär II」(‘09)を制作している時、マルコはプロジェクトのバンドの一つに参加することにして、ミュージシャンの友人を集めてバンドを組んだ。当時、マウロ・モローニ(Mellow Recordsのオーナー)が、自分のことを「The Pharaoh Of Prog(プログレのファラオ)」と呼んでいたから、マルコは冗談で自分のことを「The Samurai Of Prog(プログレのサムライ)」と呼び、バンドもその名前にしたんだ。

後に、マルコはプログレッシヴ・ロックのカヴァー・アルバムを作りたくなった。そして、キモと僕は2曲ほど演奏するよう招かれた。僕達は一緒にやるのがとて



Steve Unruh, Mark Trueack (vo. from UPF / UNITOPIA)

も楽しかったので、あのアルバム、「Undercover」(11)を作っている間に、今日まで続いている中心となるトリオになったんだよ。

— TSOPは3名のメンバーがコアとなっていて、そこに作品によって様々なゲストが加わる形を取っています。「Lost And Found」を始め、これまでのアルバム収録曲は往年のプログレッシヴ・ロックのレア・ナンバーのカヴァーが占める割合が多いのですが、一方でTHE COLOSSUS PROJECT収録曲のようなオリジナルの良さ、面白さも感じられます。これまでにライブ・バンド、TSOPとしてステージに立った経験はあるのでしょうか？ 直近2作品がライブ・ステージで演奏される可能性はありますか？

SU: 僕達にとって、トリオ + ゲスト参加者という形式は、とても上手くいっている。色々な作曲家や楽器のスタイルで作業できるので、創造に対して扉が開かれているんだ。典型的なバンド形式は固定された演奏家のセットを持つ作曲家ということになるけど、それはTSOPのやり方ではない。その代わりに、マルコ、キモ、それに僕は自分達のスタイルの門番みたいなものだ。自分達がやること、どうやるのかについては頑固だが、ゲストの作曲家やミュージシャンを使うことには全く問題がない。自分自身を上回り、これを越える音楽を作ることができるからね。

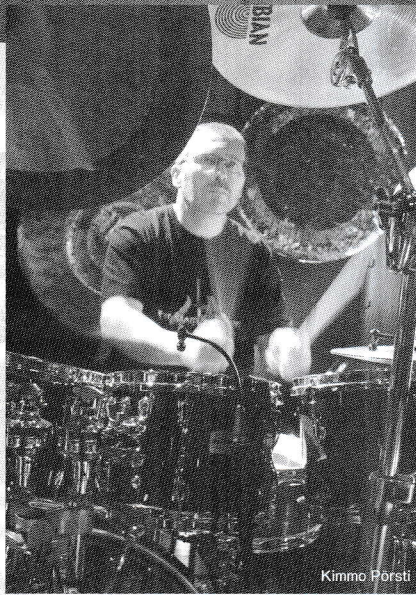
その上で、僕は「Lost And Found」の曲は「カヴァー」と呼びたくない。むしろ、曲がようやく完成したという感じだ。再生というよりは創造のプロセスだ。(基本的にカヴァー・アルバムだった) 最初の2枚のアルバムと「Lost And Found」を比べれば、非常に異なっている。

ライブでやるのはすごく楽しいと思う。いつか実現するかも知れない。でも、みんな違う場所に住んでいて、マテリアルはとて難しいので、リハーサル時間がとてもかかる。ちゃんとやるための費用や時間にふさわしい機会は現在のところはないんだ。

— 早くも次作「Ghost Written」の制作がアナウンスされています。どのよう作品となり、どのような演奏メンバーがオーガナイズされるのか、差し支えない範囲でお聞かせ願えますか？

KP: 実際、このアルバムはかなり進んでいるんだ。ほぼ仕上がっている曲もいくつかある。これまでのアルバムとは違うものになると思うし、それは良いことだとも思っている。もっとインストゥルメンタルの側面が出てくると思うが、もちろんスティーヴのヴォーカルも聴けるよ。スティーヴと僕も作曲するが、自分達の曲を上手く入れるのは大変だろう。僕達はすでに素晴らしい曲をたくさん、友人達から受け取っているんだ。ステファンによる素晴らしい曲も1曲ある。

繰り返しになるが、僕達はミュージシャンや作曲家として本当に才能のあるゲストを迎えることができて運が良い。たとえば、オリヴィエロ・ラカニエ



ラ (LATTE E MIELE)、オクタヴィオ・スタンバリア (JINETES NEGROS)、ケリー・シャクレット (PRESTO BALLET)、ブレット・カル (ECHOLYN)、デヴィッド・マイヤーズ (THE MUSICAL BOX)、ショーン・ティムズ (UNITOPIA / SOUTHERN EMPIRE)、それにトム・ドンコート (CATHEDRAL) がそうだ。また、ルカ・シェラーニ (LA CONSCIENZA DI ZENO) の曲で、清水義典がギターを演奏してくれたのもうれしかった。

— では最後に、今後の予定についてお聞かせ下さい。TSOPはこれまでにマニアに対して数々のサプライズを提供してくれたので、多少夢のような構想が含まれていても構いません。TSOP以外にも、各メンバーで何か是非語りたいと思う計画があれば、含めていただければ幸いです。

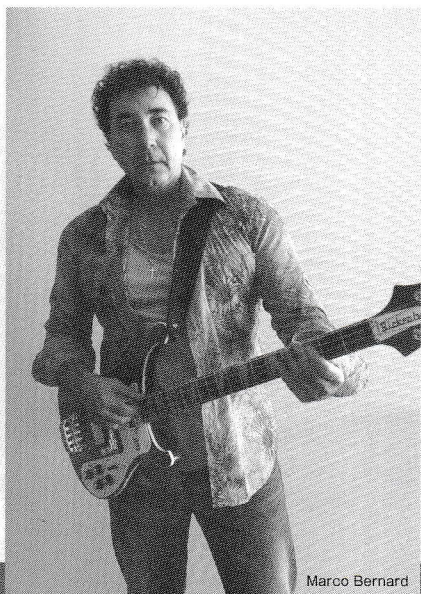
KP: 僕達はラッキーだと言えると思う。なぜならば、常に自分達が実現できる以上のアイデアを手に入れているからね (笑)。TSOPは「The Imperial Hotel」で始めたコースを歩んでいくことになるだろう。あるいは、新しい要素を常に見つけ、常時改善していくことだ。すでに、6枚目のアルバムについてのアイデアもいくつかあるよ。

ご存じかも知れないが、スティーヴ、マルコ、そして僕は、ラロ・フーパー、それにカルロス・ルセーナ (NEXUS) との OCEANIC LEGION というプロジェクトもやっていると、「Decameron: Ten Days In 100 Novellas - Part II」(14) に1曲提供し、さらに「Decameron: Part III」にも1曲予定している。これは僕達のレコード・レーベル、Seacrest Oy (Visual Power Oy と共に) から間もなくリリースされる4CDボックスで、世界中からの35の偉大なバンドが含まれている。

このリリースでずっと忙しいんだ。マルコとスティーヴは、ロバート・ウェップのオープニング・トラックで作業し、全員でLATTE E MIELEの曲で演奏し、スティーヴはUPFともやっけていて、フラン・ターナー (RESISTOR) の曲でも演奏するよう誘われている。

スティーヴは当然、RESISTOR、それにUPF (UNITED PROGRESSIVE FRATERNITY) でも忙しい。僕のもう一つのバンド、PAIDARIONは、昨年フィンランドで、数人のゲストを招いて2度ほどコンサートを行なった。このミニ・ツアーの後で、ロバート・ウェップ (ENGLAND)、ボガティ・ボコル・アコス (Bogáti-Bokor Ákos) (YESTERDAYS)、ジェニー・ダレン、オッツォ・パカリネン、そしてケヴ・ムーアをフィーチャーした特別なプロジェクトで、僕達は曲を録音し、リリースすることにしたんだ。このアルバムはほぼ完成していて、2~3ヶ月でリリースされるだろう。

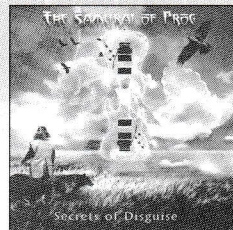
(2016.5.8)



## Undercover (11)

Musea FGBG 4884

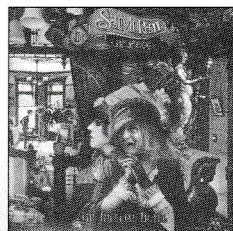
ストルト&レインゴールドの北欧勢、故G・ルブランや元THE MUSICAL BOXのD・マイヤーズらのカナダ勢、さらにJ・デヴィソン、M・マンリング、A・コスたら10人以上の大物を集めた華々しいデビュー作はGENESIS、YES、PINK FLOYD、TFK、EL&Pなどのカヴァー集となった。TFKの代表曲がラテン・ジャズ風味になってしまうなど全曲聴き所を備えているが、バンドの新曲と「PAIDARION」のドラマ、キリコに挑む」と銘打った(打ってない)ARTI E MESTIERIのカヴァーが秀逸。北欧ファンは笑い、イタ・ロック・ファンは顔をしかめよう。なお、最終4曲のELEKTROSHOCKはアルデミエフ兄弟のレーベルとはまったく関係がない(各自調査)。



## Secrets Of Disguise (13)

Musea FGBG 4924

1作目が企画物だと思っていたリスナーもちょっと不審に思い始めた第2弾。ストルト、ルブラン、デヴィソンら継続参加組とGLASS HAMMER、ÅNGLAGÅRD、NEXUSなどのトップ・バンドからの派遣組、さらにPHIDEAUX(本人)やWILLOWGLASSからの出向もあって、にわかファン思わずポカーン。ENGLANDの大曲カヴァーにR・ウェップ本人参戦、あのスペインのCRACKにも本人(誰?)参加。GG、PFM、CRIMSON、VDGGは当たり前、さあSANDROSEのあの銘曲と一緒に泣こうぜなもんや。三度笠。2枚組全15曲、トータル131分のトリビュート世界は、交渉力があたかも音楽の構成要素であるかのごとく展開。困ったもだが素晴らしい。



## The Imperial Hotel (14)

マーキー/ベル・アンティーク MAR 142269

パーマメント・バンドかよ!と誰もがつつこんだ3作目。じゃあすべてバンドのオリジナル曲かという、誰も作曲してなくて、ENGLAND~R・ウェップの未完の大曲の完成形が目玉だったりする。なんと同曲にはENGLANDのオリジナル・メンバーが2人参加。主役不在も甚だしい。主なゲストとしては、アルゼンチンのJINETES NEGROSのキー奏者(冒頭曲のピアノのインパクトが強烈!!)、スウェーデンのBRIGHT EYE BRISONからはベーシストとキー奏者が。もうひとつの目玉は我が国のKENSOから御大・清水が参加していることだろう。へたしたら演奏メンバー全員国籍が違うが、ひょっとしたらこれを狙ってるのか。おそろべし。